

はしがき

本書は世界的に有名な憲法の本49冊をわかりやすく解説したものである。実は類似のタイトルの本が20年以上前に刊行されている。長谷部恭男先生が編まれた『憲法本41』（平凡社、2001年）である。同書はそのプロローグで示されているように「憲法とは何か」を学ぶ手がかりとして41冊の憲法本の解説を読み、「改憲・護憲をいうまえに学んでおくべきこと」（副題）をおさえるという企図の下に上梓されたものであった。私が同書を読んだのは学生の頃であったが、その面白さにおおいに知的好奇心を刺激されたことを覚えている。同書が対象としていたのは主として日本の本であったが——いくつか外国の古典や法思想の本も含まれている——、外国の憲法論を参照しながら検討を加えた書籍が少なからずあり、外国の憲法本にも興味を覚えるようになった。とはいえ、すべてを原書で読む力はなく、外国の憲法本を対象とした解説本があればありがたいと思った記憶がある。本書は、その時の思いを実現すべく、企画したものである。

もともと日本の憲法は外国の影響を受けてきた。大日本帝国憲法は憲法起草に当たった者らがプロイセンの憲法等を参考にし、日本国憲法はGHQ草案を下地にして作成された経緯もあり、ドイツやアメリカの影響を強く受けている。それは憲法学にも影響しており、これまで憲法学者はドイツやアメリカを比較対象国に選ぶことが多かったといえる。そして最近ではグローバリズムの波が憲法にも押し寄せており、憲法学界隈では比較憲法の視点がこれまで以上に注目を集め、また憲法実務においても外国や世界の状況に言及する判例が顔を覗かせるようになっている。

こうしてみると、日本の憲法の基盤、構造、実践、解釈を理解するためにはその知的背景の一翼を担っている外国の憲法本を読むことが日本国憲法を理解する上でも重要であることがわかる。たとえば、法や国家はどのように形成され発展していくのかといった基本的命題から、民主主義の姿、司法と民主主義の関係、司法審査のあり方など統治や実践に関わる問題、なぜ表現の自由は重要なのかといった個々の論点にまつわるグランドセオリーなど、外国の憲法本は日本を含む各国に共通する憲法問題についてその足掛かりとなる知的基盤を提供するものが少なくない。

そこで本書は世界の憲法本を対象にそれぞれを解説することにした。対象となる本は、ロックやルソーなどの古典から、憲法の思想的基盤を提供したケルゼン、

シュミット、ハートらの名著、また人権論を展開したエマスンやドゥオーキンらの書籍、さらには現在進行形で憲法学を新たな地平に導こうとするアッカーマン、サンスティン、ポズナーらの著作など、多岐にわたる。ほとんどの本は分量が多く、難解なものも少なくないため、インターネット等で手軽に内容を把握する、というわけにはいかない。とはいえ原著にあたるほどのエネルギーや時間もない、という人が一定数いるのではないと思われる。本書では、日本の憲法学に影響を及ぼしてきた／及ぼしうる（と考えられる）本、日本への影響はさておき世界的に有名な憲法の本、世界レベルで有名とまではいかないが本国では名の知れた本、新しい憲法学のアイデアが詰まっていて今後世界的に読まれていくかもしれない本などを念頭に置き、世界の憲法本と題して49冊を選び、その解説を行うことにした。

本書が対象とする読者は、研究者のみならず、大学院生や学部生、憲法学に興味のある一般読者を想定している。各執筆者にはわかりやすく読みやすいように平易な記述を心掛けて執筆していただいた。他面、当該法分野の専門家に執筆をお願いしたこともあり、わかりやすい内容の中に専門家ならではの研ぎ澄まされた筆致が垣間見えるはずであり、憲法学者はもとより、法哲学、政治学、経済学など隣接する学問分野の研究者などの専門の方にも読んでもらえるような内容になっている。

ところで、本書は世界の憲法本を網羅的に取り上げようとするものではない。世界の憲法本と謳いながら対象国が欧米の一部に偏っているのではないかと、憲法本といいながら政治思想や法哲学的色彩の濃い本が混在しているのはなぜかといった本の看板に関わる疑問をはじめ、ロックやルソーがいてホッブズやモンテスキューがいないのはなぜか、ハートやドゥオーキンがいてロールズやラズがいないのはなぜかといった本の取捨選択の問題に至るまで、本書の内容は憲法学に馴染みがある人ほど疑問を抱きやすい構成になっているといえるかもしれない。当初、影響の系統をたどるような形にできないか、英米法・大陸法・アジア法などといったような法域ごとに分けられないか、国家論・人権論・司法審査論などのようなテーマ別設定ができないかなど、あれこれ考えてみたが、それ自体が研究テーマになりそうなくらい大きなものであり、そうした野心的試みは脇に置くことにした。

それでもなお、本の選択をもっと吟味すべきでなかったか、あるいは解説する順番をより系統立てるべきでなかったかなど、様々なご意見・ご批判を賜りそうな気がするところである。また、私は比較対象の中心がアメリカということもあり、それ以外の国についてはその国を専門とする先生の協力を受けながら本の選定を行ったため、本来であればそうした先生方を顕名して御礼を伝えるべきであるところ、

それによって本の選定などについて批判を受けてしまうと心苦しく感じるので、ここはあえて名前を伏せたまま感謝の気持ちを述べることにし、あわせて本の選択や構成はすべて私の責任にあることを述べておきたい。なお、各章に掲載されている書影については原則として原著を掲載したが、出版元との関係で翻訳書にしたり、書影がなかったりする。

最後に、編集をご担当いただいた梶原有美子さんに厚く御礼を申し上げたい。本書は各国の書籍を対象とするため、全体の統一や語句の整理に大変な労力と時間がかかり、また元書籍の確認や書影の版權確認など、きわめて煩雑な作業に骨を折っていただいた。本書は編集者の丹念な作業がなければ成り立たないものであり、梶原さんの熱意と努力に敬服するばかりである。また、一時期ながら本書の編集に携わっていただいた舟木和久さん、厳しい出版事情の中、本書の刊行をお許しいただいた代表取締役・宮田憲作氏にも心から御礼を申し上げたい。

2024年12月7日

編者 大林啓吾